

報 告

フランス、ビアリッツで開かれた連鑄国際会議に出席して

野 崎 輝 彦*

5月31日、6月2日・3日の3日間、フランスの Biarritz で IRSID 及び Metal society の共催による連鑄国際会議が開かれた。Biarritz はビスケー湾に望むスペイン国境近くの保養地で景色のよい所である。会議には43件の Report が提出され、世界各国より約800人が集まり、まことに盛会であつた。

1. 会 議 内 容

本会議は6つの session に分けて行なわれた。それぞれの Session における項目及び報告の数は、次の表のとおりである。

Session 1; 溶鋼処理及び耐火物	報告 9 件
Session 2; 機械の保全及び生産性を向上させるための諸対策	報告 8 件
Session 3; 品質関係	報告 6 件
Session 4; 新技術及び Non-Conventional	報告 8 件
Session 5; ブルームにおける工場経験	報告 5 件
Session 6; スラブにおける工場経験	報告 6 件

ここでそれぞれの Session での印象などを述べてみたい。

Session 1 ではタンデッシュ耐火物に保温板を使用し、タンデッシュ加熱費の低減、スカルの減少に効果があつたという報告があり、世界的にタンデッシュ耐火物に保温板を使用する方向となつているという印象であつた。

Session 2 は Concast, Mannesmann, U.S. Steel, Vöest, などの連鑄機械の設計製作メーカーが自社の特徴を述べた報告をし、その後まとめて討議が行なわれた。各メーカーとも、部品の取替えが簡単で、いかに保全しやすい機械であるかを主眼として述べており、特に目新しい技術はなかつたが連鑄機が導入期を終り、生産設備として、設備の信頼性や稼働率の向上に主眼を移してきた事がうかがえた。

Session 3 では B. S. C が傘下各工場のスラブ連鑄機について、品質と操業条件との関係を総括して述べた報告、新日鉄より、リバンド鋼で Tin-plate を製造する場合の諸条件について述べた報告が印象に残つた。

Session 4; この Session では、新技術又は、“Non-Conventional” ということによって発表が行なわれた。内容は In-line Reduction, ウォーキングバータイプの連鑄機、丸型断面の連鑄機水平連鑄などが報告された。この中に

U. S. Steel が 190φ 4 ストランドで鑄造し、In-line Reduction の設備を付け、鑄造速度を 4~5m/min としてストランド当りの生産量を上げ、ピレット連鑄機が、200~300 t 転炉と結ぶ事が可能となつたという報告があつた。質問の段階で、こんな鑄造速度を上げて、どんな品質のものができるのですかという素朴な質問が出て会場をわかせたが、相変わらず U. S. Steel は独自の方向で特徴のある行き方をしているのが印象的であつた。又水平連鑄についての半工業化段階での報告があつたが、この技術もここへきて、かなりの水準に達してきた模様である。

Session 5, 6; 数多くの工場における経験について報告があつた。その中で、B. S. C の軌条に連鑄を適用した経験、日本鋼管でスラグの中心偏折減少に電磁攪拌を適した経験、U. S. Steel が二冷冷却ロードセルを組み込み鑄片の断面ワレ減少を計つたことなどが興味ある報告であつた。

2. 所 感

今回の会議では、日本から9件の報告があつた。日本からの報告は総じて真面目で、現象面を深くとらえており、質問も他と比較して相対的に多く、他国の人々の関心が高い事を示していた。これらの日本の報告は、国内では何らかの形で発表されたものであるため、前項でもあまりふれなかつたが、休憩時間などにつかまり種々の質問をうけ、最後に「日本は国際会議の度に参考になる発表があり、新しい技術をもつてくるのは感心だ」と数人の人より言葉をかけられた。外国人特有の外交辞令とは思ふが、最近の国際会議では日本の報告が目だまの一つとなつているとの感を深くした。鉄鋼業にたずさわつて、25年になる筆者としては昔を思い感無量であつた。

又この会議では Session 2 で座長を依頼され、あらかじめ Session 2 における時間表を作つて出かけたが、前刷りも出発の前日にとどく様な始末であり、更に会議の前夜現地に到着とともに組織委員会と打合せた所、報告の内容数などが大幅に変わり、結果的に十分な準備ができていない事となり、ヨーロッパと日本が離れていることを実感として味わつた。会議を組織し、討議の中でリーダーシップを発揮するには、この隔りの問題と併せて言葉の障害もあり、これからの課題の一つと思う。

* (株)神戸製鋼所生産技術部次長